

## 唾液腺腫瘍の基本的な組織像と細胞像

◎石田 光明<sup>1)</sup>、野田 百合<sup>1)</sup>、岡野 公明<sup>1)</sup>  
関西医科大学附属病院 病理診断科<sup>1)</sup>

唾液腺腫瘍は、WHO 分類で、20 の悪性腫瘍と 11 の良性腫瘍の組織型に分類され、発生頻度がそれほど高くないにも関わらず、比較的多くの組織型が存在する。同じ組織型においても様々な組織亜型が報告され、また悪性腫瘍においては異なる悪性度が存在する組織型も存在する。唾液腺腫瘍は多彩な組織像を示すため、細胞診断に難渋することも稀ではない。

唾液腺腫瘍のなかで最も頻度が高い腫瘍は多形腺腫で (約 60%)、ワルチン腫瘍 (約 10%)、粘表皮癌 (<10%)、基底細胞腺腫 (約 5%)、腺様嚢胞癌 (約 5%)などが続く。これらの腫瘍の代表的な組織像と細胞像について概説する。基底細胞腺腫では、腫瘍胞巣間に紡錘形細胞の集塊が見られることが特徴的とされているが、細胞診検体にも比較的高頻度に紡錘形細胞集塊が見られ、その細胞診断に有用であることを報告した。基底細胞腺腫の特徴的な細胞像や基底細胞腺癌との比較についても概説する。

また、近年唾液腺腫瘍の一部に特徴的な遺伝子転座・変異が存在することが報告されている。代表的なものとして、多形腺腫 (*PLAG1, HMGA2*)、粘表皮癌 (*CRTC1-MAML2*)、腺様嚢胞癌 (*MYB-NFIB*)、分泌癌 (*ETV6-NTRK3*)や腺房細胞癌 (*NR4A3*)が知られている。融合遺伝子の存在を、FISH 検査などを用い証明することにより、病理診断に繋がることもある。免疫組織化学染色への応用も報告され、*PLAG1*、*MYB*、*HER2* や *NR4A3* の免疫組織化学染色が、それぞれ多形腺腫、腺様嚢胞癌、唾液腺導管癌や腺房細胞癌の診断に有用であることが知られている。分泌癌は 2010 年に報告された組織型で、当初は乳腺相似分泌癌と報告された。*ETV6-NTRK3* 融合遺伝子を有することが特徴的とされ、*pan-Trk* の免疫組織化学染色がその診断に有用であることが知られている。分泌癌の特徴的な細胞像が報告されているが、腺房細胞癌との鑑別が困難なこともあり、*pan-Trk* の免疫細胞化学染色を行うことにより、分泌癌の細胞診断が容易になることを報告した。分泌癌の特徴的な細胞像や *pan-Trk* 染色の有用性についても解説する。